

## アソカ講話065

### テーマ「平穩死のすすめを聴いて 1」

先週、研修で「平穩死のすすめ」を聴く機会を得た。

命の火が消えるのは自然の意志。誰もそれを止めることができないし、逆らえないこと。医療も老衰を治すことはできない。自然に任せた最後は、最後まで尿が出る、呼吸苦が無い、浮腫が無い、平穩な死が迎えられる。病院は治療する所であり、老衰は治療できない。医療職のもう一つの大切な役割として、病気と老衰の仕分けがある、特養はケアする施設として医療の対象で無くなった老衰の方が平穩な最期を迎えることができるよう最後までケアする役目がある」と述べられた。

戦後、高度成長期を迎え豊かになった日本、それは、医療の発展をもたらしたが、その陰で人が人らしく自然に死んでいくことを失った半世紀でもあったようにも思う。

特養に勤める者の一人として、人生の最後をどう迎えるか、一人でも多くの方が自然な死を迎えることができるようを務めていく必要があると改めて痛感した。最後に良寛和尚の言葉を紹介された。「死ぬ時期は死ぬがよかろう」。かつて死は日常であったように、自然な死として、普通の考えを取り戻すべき時が来ているように思う。